

第2章 銃後

子どもたちの生活②〔北海道・札幌〕

国民学校での毎日と戦時中の学校生活

ときみつ
ただし
硯光 直さんのお話から

私は昭和九年（一九三四年）に生まれました。今の小学五年生の時に戦争が終わりました。そのとき住んでいたのは白石村の大谷地です。当時、駅はありませんでしたが、今の平和駅の辺りに十軒ぐらゐの集落があつて、そこに住んでいました。

通っていた学校は、今の太谷地小学校です。昭和十六年に入学し、昭和二十年八月十五日の終戦を経て、昭和二十二年に卒業しました。入学したとき、学校の名前は小学校ではなく国民学校でした。私が卒業してから小学校に呼び方がもどりました。どうして、名前が国民学校になったのか私もあまりよく分かりませんが、当時は戦争が続いていた時代でした。

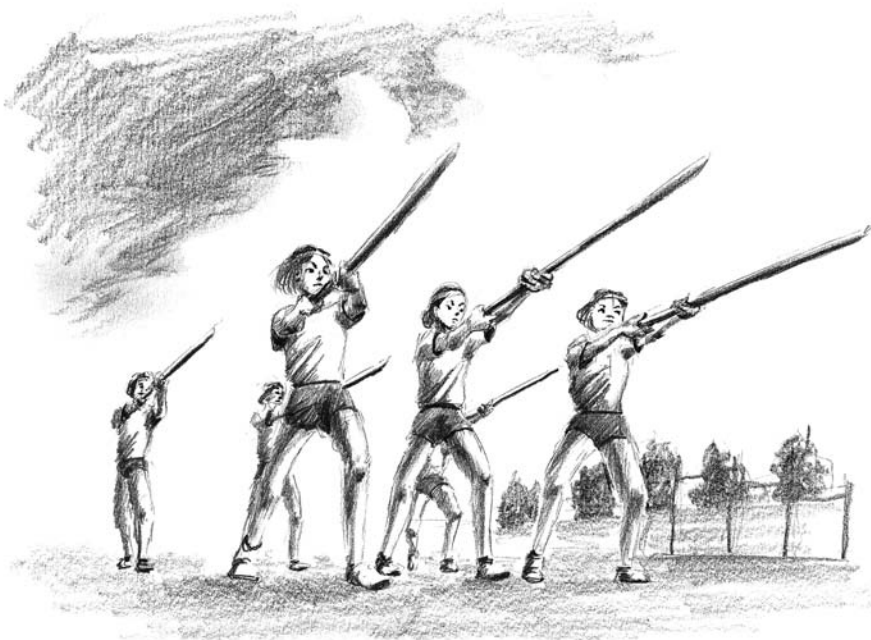
国民学校とは、兵隊になるために子どもが体をきたえる場所と言われていました。もちろん勉強もするのですが、戦争のための学校ということで国民学校になったようです。

国民学校 昭和十六年（一九四一年）の国民学校令というきまりにより、これまでの小学校を改めて成立した、国民の育成をねらいとする教育機関。

○武道 武士として身につけるべき技。剣術や馬術など。

国民学校ではあまり勉強をしたという記憶はありません。戦争中、学校の科目には何があつたのかがあまりよく思い出せないのです。兵隊になるために体をきたえるということで、武道の時間がありました。武道というと、みなさん剣道を思い出すでしょう。ところが、剣道着もなければ竹刀もない。なにもないのにどうやって武道をやったかという、ただの木のぼっこを使いました。木のぼっこで何をやったかという、グラウンドに棒を立て、その棒に人の形をしたワラの人形をくくりつけるのです。それを敵に見立てて、木のぼっこで一人ずつ「えーい、やあー」と打つのです。体育の時間は、こんなことばかりやっていたように思います。女子は、なぎなたをやっていたというのですが、私は覚えていません。

授業時間には、よく援農えんのうということをしました。援助えんじよの「援」に農家の「農」です。農家の人を助けるためにみんなで手伝いに行くのです。兵隊としてお父さんやお兄さんなど男の働き手をとられてしまった農家や、あるいはお父さんやお兄さんが戦死してしまった農家によく行きました。何をやったかというと、芋掘りいもほやにんじん掘りほです。一番たくさんやったのは燕えん麦ばくの草取りです。燕麦えんばくは、カラス麦といって馬に食べさせるためのものです。そのころ馬はすごい貴重品きちょうでした。人間は、国からのたった一枚いちまいの手紙で、兵隊になるため軍隊に行かなければなりませんでした。しかし、馬は、軍隊が高いお金を出して買ってくれるので、「馬の方がえらい。」とよく言われていました。その馬に食べさせるための燕麦えんばくが成長すると、なぜか菜種なたねという黄色い花を咲かせる草がびっしりと生えてくるのです。燕麦畑えんばくに生えている菜種なたね抜きをみんなでたくさんやりました。一週間に二、三回はやった覚えがあります。ですから、あまり勉強した記憶きおくがないのかもしれないかもしれません。冬は、朝早くに学校へ行って石炭ストーブの火をつけました。当時は用務員ようむいんさんはいませんでしたので、先生と子どもたちでストーブの火



イメージ図

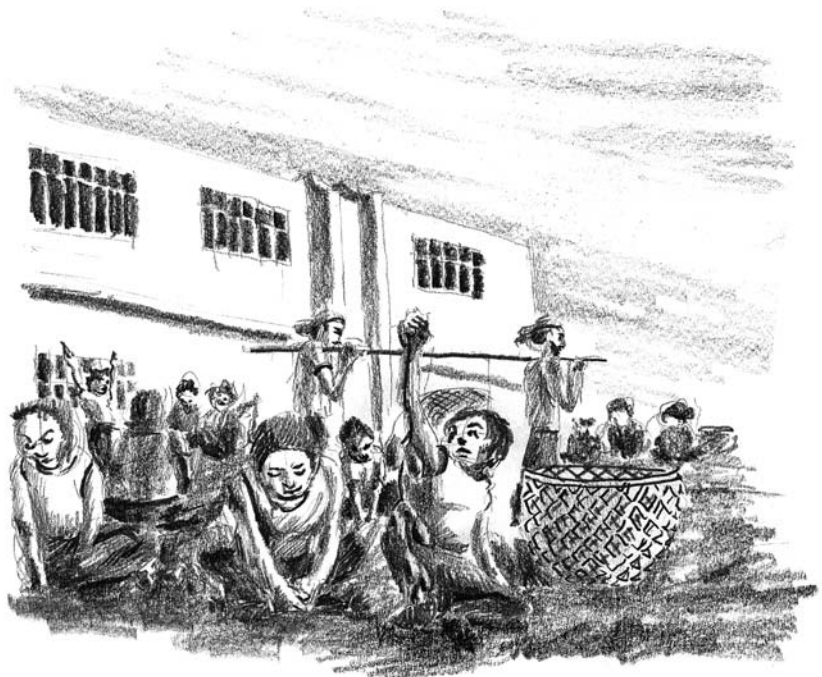
国民学校における武道の時間

○たぎつけ 薪や石炭などを燃やす時、それに火がつくように最初に燃やす、燃えやすいもの。

○シラミ シラミ目の昆虫の総称。吸う口をもち、人間や家畜の吸血害虫。体は小さくてひらべったい。腹部は大きく、頭部・胸部は小さく、はねはない。

をつけるのです。当番を決めて朝早くに行き、新聞紙に火をつけて、松の木をのせて、火がついたら石炭をのせる、そんな火のつけ方をしていました。その松の木はどうするのかというと、授業時間にみんなでとりに行くのです。秋になったら毎日のように大谷地神社に行きました。松の木がたくさんあり、大人が木の成長をよくするために下の方の枝を全部切って、置いておいてくれました。みんなでその枝を学校に運び、たぎつけにするために細かく切りました。九月から十月ごろはそんなことばかりして過ごしていた気がします。

面白い話があります。学校で先生が「出席をとります。阿部さん、伊藤さん…」と出席を取ってから「一列に並んで、はじめ。」と言うのです。女子が並んで、男子が並んで、なにをやったのかというと、シラミ取りをやったのです。シラミというのは動物の血を吸う昆虫の一種で、そのころ男子の頭はぼうず頭でシラミはほとんどいませんでしたが、女子の髪は長かったので、中にいっぱいいました。男子が女子の頭のシラミを取ってつぶすのですが、パチーン、プツツ、プツツ、パチーンとそれはいい音が出たものです。なぜシラミがこんなにかとというと、戦争のせいで生活が苦しく、なかなか



イメージ図

校庭での芋掘り作業をする学校

かお風呂に入ることができなかったからです。それに、殺虫剤もなかったもので、つぶすぐらいしかどうしようもなかったのです。風呂に入るといっても一週間に一回ぐらいで、風呂のない家がたくさんありました。髪の毛は、川で洗っている人をよく見かけたものです。シラミは髪の毛の中だけでなく、服の縫い目のところにもかくれていて、ストーブであたたまると、もぞもぞ出てくるのです。服を脱いでストーブの上でぱつと払うと、パチパチと音をたてて死んでしまう。家に帰ってからよく親にやらされました。寝まきを着るときに、あぶっておいて振るとシラミがいっぱい出てくる、そんな時代でした。

戦争に負けたのが八月十五日、天皇陛下のラジオ放送があるというので、親がラジオのある場所へ行きました。放送が終わり、帰ってくるやいなや「日本が負けた。大変だ。これからどうしよう。」といったのを覚えています。小学五年生の私は、日本は絶対負けなと思うていましたから、畳にひっくり返ってこれからどうなるのだろうと考えていました。今こんなに平和な良い時代になるとは、思っていませんでした。

国民学校のころ、物はなにもありませんでした。そんな暮らしの中でも、我慢をするという心はありました。なんでも我慢できる。どんなつらいことでも我慢できる。おなかが減っても我慢できる。欲しいものがあっても我慢できる。我慢できる心があるということも必要だと思えます。今はなんでもある時代ですが、みなさんの中に我慢する心はありますか？

DATA

平成20年度白石区平和事業
聴き取り

- ・平成20年8月22日
- ・東川下小学校



.....

剛光 直(とぎみつ・ただし)さん

- ・昭和9年(1934年)生まれ
- ・札幌市白石区在住